

就きて事に觸物に當つて研究せられんには殆んど學事を修業するが如く順序立つて彼の二三年立つともハルフ一つ何が何やら譯らぬ様をかむしや連の跡を絶つ事予鋤月は保証致置くも格別差支なるべしと存じたり左れば本書は細微を尽さるれども前章に述べたる如く順序を追て習熟する方法を定めたるものなれば、本書を階級稽古法と稱へたるに實に當を得たる者と云はざるを得ず、之れ藝道とは云へ茲に至つては義太夫學也江洲の諸賢徒らに讀流しにせられざる様希望して止まざるなり

石村檢校 竹廻小田卷

上の巻 口

志賀の里石村住家の段

山田鋤月著

抑もく松の深緑換らぬ空の天と清み地と定りし開の昔出雲八重がき妻ごめに語らいそめて戀初めて妹と脊子との色わけて染めて着あして空だきのけむりに匂ふ袖袂かざすは花の臘夜に其の下蔭を栗りにて操り廣げたる其文の頃は文祿初つかた洛東志賀のはどりに栖ひ石村と云ふ檢校あり生れも附かね盲目の春は來れども只夢斗りの浮世とて哀れ粟津の一夜睡り心にもなき韓鞆の曉き破る三井の鐘算ふる袖や時雨ふる松唐崎に濡増して堅田にあらぬ盲目の片輪車の糸と尙又たつれくに出出す琵琶の音色は逢阪の開の草蔭の柴の扉にふり拾られし蟬丸が古を茲に曳く關やりんくとして若駒の轡の響呀渡るみがきが原の明

海 潮 瑠 璃 秘 傳

とそをだんしようど此間うら此方が来るのを待ち暮らして居ましたと云ふに平兵衛尙さし寄り、フム扱は兄御も其心でア、兄弟は争うわれぬ實は此あいだより、必をかこうかと、われらも其工風斗り、辨財天を初め、高雄の神護寺、宇治の橋姫方ぐの神や佛に祈誓を掛け満願は昨日何今日は吉左右がと朝から据わる店の仕事場、御燈明あげて御酒をなへ心を清くして採る庖刀に、一心寄せた其處へ來掛つたは、紅殿の雜掌、龜井の鶴彌、太例姫君の琴の催促、扱くせわしと思ひ引替、向ふは落附き此程いかれた薩摩降りの土産話種ぐ語る其中に、琉球國の人喜屋筑登志、顔鴻基字は延徳と云ふが、蛇皮線と云ふを曳いて、當間筑登志紹達道、字は隆嘉といふものが、唄をうたうたを聞いたが扱く不思議な樂器で其唄と云ふは何と兄じや人妙な言葉ではござんせんか、さよのはこらじやを、おれがなたてゐつばてをるはなの、つゆけたとと唄ふのを聞いたろうでこりや考へ事じやと能々知せに來ましたが是社、實に神や佛の告ならんと尙も委し

海 潮 瑠 璃 秘 傳

海 潮 瑠 璃 秘 傳

う尋ましたが皮のはつた處は角丸にて、黒檀の様な木にて製し夫から二尺程の細長き紫檀の木にて、上に三すぢの糸の糸巻あつて其上は蝦の尾の如き形に作り、象牙を以て撥となすとか、惣丈け凡そ三尺程と聞いた嬉しさ堪がたく兄御に話して俱く、都は愚か黄金花咲陸奥や、胡沙ふく蝦夷の果までも世に知らさんと今茲に願の節は幾千代の竹のゆかりの縁にかくる蜘蛛の糸頼母しき振舞は、目は見ねぬとも目覺しき兄と弟の交へし膝の附合ひて茲に顯はす三味線の、其師の世に傳ふ事の起と知られけり、檢校見ぬ眼を見張り、ナ、嬉し、喜ばしや、是と云ふも此方やはあらし、是につけても行空は、雲と隔たり霞と籠めて、八重の汐路の八汐路の浪路遙かにくにて、鬼栖む鬼界の果は愚か、身は和田づみと雲井に任す千鳥さへ通ひもあへぬ琉球とや、うの往古安部の仲鷹の異國を得んと玉兎の集、取りも果す鬼となりし、試しあり、殊に我は盲目の身思ひ感ふ

海 潮 瑠 璃 秘 傳

八十八
もかぞましや、平兵衛勇を附けんとて、イヤ喃う兄上さう思はるゝは道理なれど、取越苦勞は入らぬ事、か程迄に神佛の應護の深き我々二人、何とて脚躰ふ事のあらん、夫々用意の調ふ上へ、一刻も早う、かしき立するかよからん、姉上の歸られ次第旅の調度の仕度せんと、勇めに檢校ある程、此は實に、我のあやまり也、假令運命果敢なくて、道に倒るゝ事有とも、少も厭ふ事あるべき、向も守らせたびたまへと、兄弟共に手を合せ、祈念をこらす表の方し、う立聞妻、鍵片手に魚の籠提げしは、里の土産と知れけり、網戸を明て内に、入りこちの人、只今歸りました、平兵衛さん、ようこそ、おめでと形粉りも愛くるしげに挨拶も、ようす床しき女房へ、アノお二人さんとも唯今表で聞きました、何じややら遠い處ろへ、行かしやんす様で、ムんすが目かいの見ね、夫檢校殿ぞうぞ、私しも附添に、連れていては下さんせぬか、と云へば、檢校此方向き、チ、過分な女房、辱い、サレど、コ、をよう聞てたも、今度平兵衛と行くは、鳥も通はぬ琉球國、うなを連れては、わしは目

かいの見ね、ぬ物、うなは女困るは、平兵衛只一人、夫じやに仍つて、うなは跡の留すして、たも合点がいたか、承知か、と、理りせめて話すれば、平兵衛もチ、そりや尤も、姉御も共に、と云ひたけれど、兄者人の云はるゝ通却つて、道の難義に成うも知れぬ、ドウアア留主の内は、憚りながら、私しが所も心を附けて下されど、云ふに女房も、詮方なく、涙吞込み、てあゝいと返事も精一ばい、袖かみめるぞい、ちらしき、平兵衛向も言葉をつぎ、又弟子衆へ代り稽古の手繰もある合点して、下だされて、重疊、く、探善は急げの諺なれば、私、私、是から何かの用意と云つゝ、門に立出つれば、ボンなら弟急なれど、明朝出立と極めようぞや、チ、承知、左らば、姉御せ、おさらばと、別れを告る夕、告る鐘は、暮六ッ、平兵衛は、白川さして、歸り行く

第二節 全切

妻は跡を見送りて、網戸を、めて座に戻り、氣を取直し、夫に向ひ、アノ檢校殿、今日里へ居だれば、うれは、く、と、い、さん、も、母、さん、も、機嫌が、よう、て、アノ、ろ

ちが夫の、檢校殿目かい社を不自在なれ、今の世に二人と云い名人、必ず大事にせへど、くれぐれ云しやんして、ソレ此帖は、晩のお看に上へど父さんが、釣らしやんしたを持つて歸つたので、ムんす、フウそれはさて何日も舅殿の深切辱いす、其深切に附けて其方の深切此年月長くの世話過分である、今更辱いと台す手はわりなき妹脊の情かな女房其手を押別けてはてマア譯けもないチホナホ、マア何處に女房に禮云ふものがムんすモウくくそんな事は云て下さんすなチ、夫そうと晩の仕度も其儘にドレ夕飯を上げましょと氣をかへ立つて勝手口取出す膳と溜め塗りや心も清き潮の底の玉藻に酒添へて火鉢の傍に押直し竹燈台に灯をともし、アノこちの人翌朝はどうから行かしやんす今宵は緩り何歟の話し、マア酒でも喫べて夜ととも語り明すでムんしよと火鉢に掛ける帖ならで、女房の愛の窪深く、そも馴染めて今年迄算る年も両の手に満る斗りの中なりき、尙も女房は愛添てドレ私しがお酌をまこしうと汲めども附きぬ、盃

は夢と幼の別路や、春の夜くの花に宿し月影も夫はさらに見れぬ身いといとしさいやまざる、うれにまだく明日より着なれもあへぬ旅衣はさもあらはぬ草鞋履海こへ山こへ里をこへ、幾夜も荒き浪枕二百里いては磯に寐ね伏猪の床に夢も成るまじ、三百里四百里五百里と往きて返りて千里の道命をよする細杖と弟御か便とは、よもや體も繼くまじエ、どう仕様と斗りにて思はずわつと聲立てて、夫の膝にすがり附てらくく時ならぬ涙の時雨降り灌ぐ心を憐れ、いぢらしき夫も涙に聲くもりはてマアソウ泣きやんなうあたがさう泣きやると、なんぞ死なわかれでもする様よ、わし迄涙が出る、イヤ暗此度行くのは一世の曠業ソラ譯なう果せる物でもなし、只さへ闇に送る浮世を汐に宿り風に寐て、幾世重る闇の闇覺束なさも一しはなれと思ふ願は、身にも命に換難し暗コ、をよう合點してたも、モウ泣きやんなアイサア最う夜も更けたさうな納めの盃受けてたもと、手に持ち添へてつゝ酒の、つさぬ名残につさ出す、遠

海潮瑠璃秘傳

山寺の後夜告る、花の木の間を潜ぐりくる、鐘の響に屹度あり、あゝアを聞きや、アノ鐘の音社そは糸の調子の始めにて、あらゆる樂器へ四季の音色に呂律を傳へ、春は錦の花綾衣稍を鏝る木々のいろ、双調どころ名けたり、夏は炎に身をこがす澤の火垂の寄る邊の岸に露を味ふ入合、黄となる鐘の響とかや土用は、一越秋は又金風染る峯々の紅の霜の夜に萬の物の唄ふ聲寂滅爲樂と一樣に平調とかや開ゆとや冬と黃道の草の原涙の雨や降しきり逆巻寄する水の音滔々として凄まじく、蒙々として鳴る鐘の磬沙調と名づくとかや、尙此外に一と年を月に別けたる調子の數總ては十二あるなれど、何れも今云ふ心之おこども道に堪能なれば、若し又我々變われバ傳へぬ弟子に傳へてたもと、殘る方なさ心の奥忍ぶ涙の忍ばれぬ遣る瀬憐れな別れなり、妻は形ちを改めて、夫の顔を打守り、ア、言ふに言はれぬ心の調子合点でムんで女でこそ石村檢校の妻必ず案して下さんすな、ソレにつけては此間わたしが作つて、此様が下と附けさせやんし

海潮瑠璃秘傳

海潮瑠璃秘傳

た涙の都唄ふて下さんせ、耻しながら今宵名残りのおさかかに、ドレ私しが弾じて見ましよう、傍に立てし妻琴を合と調子の手の綾は、糸しらしさの小田巻に結し縁の深き江や、底の玉藻も見へぬ目の夫に立つる真心は、ふせ屋に生ふる簾木の、あるにあらぬ思をば、掻きならしたる妻琴は、『久方のく雲と見紛ふ白浪の浪のひまゆく丸木船いくよゆらくゆられきて、夢も通ぬ梅枕よるべ定めぬ浮寐の鳥の汀の葦のつゝもなや、く、見わたせば有明月の細眉に、柳の腰のなよくと紅る翠の袖薫る羅綾の寄南香のたいならぬ、天津乙女の二人連、我立つ汀へ金の砂踏み別けて来るよと見へしが物をもいはず両の手を取るとおもへばいつとなく瑠璃のいらかに瑠璃のはしら、黄金いろざる閨の戸に、いると思もへば錦の戸張打覆ひて、古郷戀ふる夢や忘れん、さす手引手もたいあらぬ、妹と春山の中を行く水辺にありし、浦島が子の古言は龍宮界に戀の花咲せし唱歌のふしのいろ、それは其の名も琉球に

海潮瑠璃秘傳

響の種を拾はんと翌日旅立の名残の曲唄ひ納むる折あらに、曉告る鷄の
 聲いぎ用意しや女房も取片付る表の方杖の音さへ噪がしく虎澤柳川淺
 利市川佐山の檢校打連立ちて入來り、盲目同士は辞儀もせず、咄々石村檢
 校殿、ふあたは今度平兵衛殿と打連れて、遠い異國へ行かれると聞いた故
 校殿も誘ふて暇申に來したぞや、隨分路は氣を附けて、尙も體を大事にと虎
 澤檢校が竹割つた直な心に親切見えて、云ふば柳川糸しげに、目かいの見
 へぬ其上に長の宿りに氣を附けて、風引かぬ様なされへかし、市川勇めて
 コレ、石村檢校殿、コレに連る人達、皆兄弟も同じ事、留主は體に引受
 けた、心残さず行しやれと實心實に有難き淺利の檢校が淺からぬ言葉に、
 佐山はさつと扇を廣ろげつ、目くら滅法に立ち上り、目出度い、此門
 出、何に稱へん方、なもししらぬ旅路も何のろの、岩をも通す桑の弓引いて
 絞つて放つて、的に矢はか遁さぬ此方の願望共に、壽く福徳圓滿、無量の喜
 涯りなし、ツナ共、こちの人案じる事は、ムんせぬ、神の御告けよ着る旅

衣解いては、いいて朽せぬ譽揚げて都々入る船唄の、帆影見ゆるを、楽しみ
 に、神や佛に願の糸を掛けて、指折數ゐて待う、チ、チ、辱なやかことを初
 め、皆の衆の力らを添て給ふもの、聴て吉左右知らそうと勇みに勇む其處
 に、平兵衛調度を整ゐて、兄上用意と出來た、や、皆見送り、か有難、コレ
 く、姉御盡ぬ名残り果もなし、早出立たんと急き立つる、アイ、合点
 と、袴を附る杖渡す草鞋はかせて連雀に、合利を脊に結び付け、結ぶ妹脊の
 暫しは惜しむ、鴛鴦の片羽の別路や、氷る嵐の夫ならなく、春の彌生の露
 籠むる八重の汐路の八重山島や、夕べ暁の月影宿る花の櫻の島影見れば、
 移る白縫綾瀬浪のをさつと乗り切る薩摩の果は茲に尤る、願の玉の龍の
 都は琉球さして行く空の

○中の巻道行浪の八重山

『見渡せは、空行雲の粉彩や、賤はた帯のかた結びかたわくるまの舞ふ
 淀の瀬々の漣打起へて、淀つ流れ行末は頼みをかくる水無瀬川命ぞせめ

て寶寺寶の山と心ざし心細さの細杖に江口の里の假枕假の契りの女房
に夢も夕べと長柄橋筆にもいかで住吉の岸打波の已れ而已碎けて物を
思ひ棄の末は葦やの浦傳ひ海士の漁火ちらく影薄雲の棚びきて月
にぞ早く鳴尾崎ありぬ雁はありもせで誰か敷妙の布引や幾世生田の
もりの露ぬれて妻乞小男鹿のつもの松原蔭暗くこやのあまふき宿もな
き我をば呼んで誰とかもア、呼子鳥覺束な關ふきこゆると詠じけん須廣
の鹽屋に心なき海士も慰む月花のしは木の櫻折かざし月洩れてとや久
方の雲井の庭に立花の島の夕暮や心播廣に縫う旅衣衣かたしく明け行
空の天の岩屋の瀬戸打越ねて忍び逢ふ夜の香のみぞ暮ふ梅の花咲く室
の津の其明ばの東雪や四國路跡になみにひたぬる袖にもなびく柳か浦
や柳髪風梳りしわが黒髪のとかね櫛田の神伏拜み道の果さへしらぬひ
の筑紫の果も迷ひてもあればある世の命運共に千歳を松浦の川の韓紅
に染川や身は菊萱の關こへて漸茲につく杖の細き命も琉球の貝釵山の

磯邊よこ社ろは
遙かなる雲の絶間に掛渉す糸の岩橋夜ならでわれは夢路を辿り來て、う
きの、葦のうなる、うつろう舟の寄邊寄々汀の磯の見上る嶺嶺の
如く立つる屏風の隙洩る風の磨き上げたる孤林の月峯には松杉鬱蒼と
虚空に聳びぬて晝尙暗きもうもの、兄は弟を力らにてすがる杖さへ菅
菰の遠き海山こゆるぎの、石くれまるふ濱邊なる、鹽の苦家を訪問へば内
には、上布織をして娘の龜尾立出て見馴れぬ姿おかしげに、見上見下ろし
つくねんど只豚め居る斗りあり果は盡きじと平兵衛が小腰ういめて會
釋なしサテ是は日本の者にて候が尋ねる人のおわすれば兄は、めしるを
いとひもせず遙々尋ねる其人は顔鴻基又一人は沼達道隆嘉とて、一と年
玩紫に遊れし其處にて住居を聞しに、今此國の貝勒山に世を捨てて、
るよし道をしらぬ我等兩人もし御存じなれを教へてと云ふば此方は打
うなづき、さては日本の人々とや喃なつかしや道もふしねて參せん尋ね給

海潮瑠璃秘傳

ふ其人も、折々磯に下り立て魚を釣るゝ事あれば、自からも馴染なり暫し我家に這入らせたまへ、今に父上歸られなば道のしるべも、なしまいらせん、イザ兎も角も此な方へと思ひがけなき親切に、二人はうれしく打通りコレはさて辱し、サラば暫しは休まし給へ、レテ我さす方の貝勒山とは、是より道の程と如何に、何里程やと尋ねれば、檢校も言葉を添ひ、チ、それく心元なう來し旅なれば、行手の方も思わるゝコレ娘御教へてたべと有ければ、娘は此方の峯さして、アレあの山が貝勒仙此よりは程も近けれと云わしき道の九十九折案内なうては思ひもよらず、一里程もあるべしと云へば、嬉しく平兵衛もフム一里に足らぬ道とや、有難し辱なしと合掌し、日本の方を手を合せ兄弟共に神佛禮拜する社ろ道理なれ、娘は表の方見やりあれく父さんが向ふから歸らしやんしたわいなあと、云ふば平兵衛打眺め、フム扱は父御が歸られしかと云ふ間程なく主じ秋香、内に入兄弟二人に打向い、コハ日本人にておわするよな、よくぞ尋ねて來ませしな龜尾

海潮瑠璃秘傳

海潮瑠璃秘傳

やよう留守して居やつた、シテ留守の中は格別變りし事はなかりしか、いゝ何れもソレは重疊くと云つ、座をも改て扱日本の人達わざと云ふ用にて來れしな夫云われよと有ければ、檢校膝を進ませて、サレば我等二人は日本の國山城とて、君の座しませす都の物、先程も娘御へもうす通り此國の樂の名人、顔鴻基殿と紹達道殿と云はる人、ある年筑紫に放て蛇皮線の調らべありしを聞傳へ何卒して我が日の本に傳へんと、育かいの見ねぬ身をも厭わす、是なる弟平兵衛と遙に参りし此國の、此から程も近かしと聞けど、東邊なうては登はられぬ、貝勒仙の庵をば教へて下され御亭主と云ふに、秋香感じ入、扱々御身は珍き世に有がたき心ざし知らるゝ通り、彼樂器は世に類ひなき妙なる物、殊又此山の二人の名人兄弟は、國にも勝れし妙手にて、娘も我も近附きなれば、是より直に案内して願の程も頼んで見ん、夫れに附いては近頃押付けがましけれども、日本の方を見掛けむ、そめも我も頼みあり、其の一通りふ二人共、宿り不思議の一樹の蔭に、汲

海潮瑠璃秘傳

海 潮 瑠 璃 秘 傳

みても盡きぬ深き仔細元と某は此琉球の離れ嶋沖永良部の者なりしが、抑蛇皮線の皮と云へは、實は海蛇の皮にあらす我住む島の荒磯に碎る浪の打寄せる岩の狹に潜み居る永良部鰐と云ふ物よて唐の名を慈鰐と云實にも得難き物なれど我すぎはいに是非あくも夫れを取らんと雖て丸木の船に櫓拍子立こぎ出る方は秋の夜の夜半の中空澄み渡る海邊をさして十町斗り揺わけ乗わけさらくくさつくと聲揃るへ葦の茂りに船押ひうめうめいひ寄し嶮崖の千尋八千尋青海波の蹴立つる中を事どもせすもりを小脇に進む折ねろうは鰐にあらすして龍神にやありたりけん俄に入重霧立くらがつて波間をよぎつて大蛇の形火焰の如き舌振立只一呑に我舟を覆がへさんす其有様畏ろしくも又凄じ所詮運命叶わじと心を静め合掌し八天龍王天龍八部感應納受の誓ひの舟守らせ給へと祈り立て暫しは目も閉ぢ心を静め身を伏して又更に人心地とてなありしと龍神納受なしたりけん不思議や鳴動俄に止んで見上

海 潮 瑠 璃 秘 傳

海 潮 瑠 璃 秘 傳

る空は換らで清き秋の夜の有明月の薄はの影に、あたりを見れば茲はそも如何に何とせん何日かゆられて吹流され漂ひ附きしは長門なる赤間の浦の果なりしか歸る便の無き儘に一ト年あまり送る内ふと馴染しは海門とて所の庄家の女にて程なく一子を分娩せしは此の龜尾程なく妻は産後の腦に世を去りたれば娘を連れて國へ歸り成音もなく送りし浮世は十五年其后世活の便にて住換れたるは此貝勒山の麓にて、あいま換わらぬ漁師の業然るに娘も人と成るに附け筑紫のちいば、戀慕ひ、一度は尋ねさせよとて、長の月日我をせがみ便りあらばと思ふ折柄來ませし御邊お二人何とぞ歸國の其折には娘を連れて下さる機頼みと云ふは此一とふしと云ふに娘も手をつかへ、今といさんの話の通り、ををぞつれて下さんせ其換り蛇皮線事は身にかへ命にかへ屹度お望み叶へませうと云ふ、兩人打うなづきハテ扱夫れはいと易し、筑紫と云ふは程もなし、船に頼まれましたたぞや心置なう歸りには是非連立んと両方から頼まれ

海 潮 瑠 璃 秘 傳

合ふた不思議の縁、不測の由かりぞ怪しけれ、秋香二人に打向ひ先づ何よりは此度此濱に、年に一度龍神祭る祭禮の其肝煎に我等が當り、今日は都へ魚賣りにいて歸るさに俳優を雇ふて連れて参り、去が今日より五日の其間舞曲の稽古か濟み次第宮の祭りに踊り、實に珍らしき物なれば歸りは丁度宜き頃なるべし、國への土産に見て行うれよ、今は一段と辱し、イザ是よりは案内せん娘留主しや二人の衆サア話しも浪だ早参ろうと身ごしらへ、はふの用意と鉄炮肩に菓の踏履き降り立つ庭に續ゐて二人も喜び合ふて草鞋結んで此方の方の斷涯さしてぞ登りゆく

○峯の松風新曲

『抑琉球國貝勒山と申せしは、國中一の高山にて崑々として雲にろびへ、谷深して川早く、水湧涌と湧かぬ、道巡て羊の腸の如く、峨々ど聳ねし崔嵬の山は、曾鐵の生茂り見上る方は白雲の包ひ梢の、朝たの露の下陰に暫し佇立み、休ける遙に通浪音や虹の棧梯とだへまて、深山鳥やぬね、鳥夫れ

かあらぬか吹來る風の耳を掠めて微妙の調さす手ひく手のさろはれは、そう連々離々やりんくく、簪々曉々呂々律々流がる、水に松風の影を宿して余念の塵を拂ふと袖の旅衣解けし霜夜の虫の音ならで、茲に傳へて浮立つ足の平地離れて天邊近き、具勒山半腹に風が持て來る微妙の調べ、二人はアつと感にたへ、尙急がんと歩を早め、谿を越へ草押別けて斬うと此嶺頂に止めし杖實にも石村兄弟が堅き心を類稀れなる喜びは、思遺だに嬉しけれ

○三味線傳授の段

芹を遠く今茲に結びし柴の靡には、本有心連の月影潭へ千かやの床に清風蘿香をくゆらせつ、兄の鴻基蛇皮線止め、紹達道に打向ひ、イカニ弟今彈き出す糸の音に傳ふる蜂の颼を返す有色の支、ねしは我家を覗ふ人あるべし、早見て参れとありければ、紹達庭に下り立ちて網戸引明け、感じ入實に兄上の仰の如く、三人の人の來ましたり、其一人は秋香殿跡はやまどの

海潮瑠璃秘傳

人らし、イザ入られよと有ければ、三人はアつと感に堪サテ、道の妙
手とて、神通得給ふ如くなる、實に有難喜しと、打堪つゝ内に入り、椽側に
ひさまづき、秋香二人に折向ひサテ此頃は磯にも來たまわす、如何に御消
光しにやと存せしに、先づは御清壯にて御無事の顔、實に嬉しう候と、挨拶
すれば、鴻基も此方に打向ひ、久しや、秋香殿御身も事無く至極せり、シ
テ是なる日本人、如何ある事にて遙々と此琉球へ來たられし様
子如何にと有ければ、平兵衛檢校進み出で、何をか包み申そべき、某二人は
兄弟にて、日本山城の者兄は石村檢校とて、樂器の師にて候が、又私は製
作の業を營む石村平兵衛と申者、先頃都山城にて、計す貴國の樂器を、世
にも稀なる器にて、世界に類ひさらになし殊に名人喜屋筑登志殿弟當間
筑登志殿勝れし腕と承わり兄は目かゝるの見へぬも厭わす、何とぞ教を受
けんとして、かたき心はかた糸の夜とも別かすひるとも別かす、浪乗船の音
凄く、五この雨に簑ぬらし、絞りし袖も幾度の歩行重ねて参りし我々秘

海潮瑠璃秘傳

海潮瑠璃秘傳

田御傳授くださる様、偏に願ひ奉る、フム扱は道に心深く、教を受けんと來
られしか、適れなる志し實に感心致したり、何とて我に違背あるべき、教
傳へ参らせん、檢校殿は、イザ此方何と我坐す前に据らせつ、二人に向ひ秋
香平兵衛二人の衆は、暫次ぎに間を隔休息ありて然るべしと、蹴蹴正しく
座を構へ、蛇皮線取りて手に渡し、イザ精神を丹田に納め、一切余念なく聞
かるべしと、云ふに、檢校嬉しさ堪ぬ、面色の色、黒白も影もなく、光りも更
らに常闇の僅かに洩るゝ日の方に、にらみ詰めたるそうでんに、喜び涙打
たゑ、息を詰身を沈め、心を澄ま、盤がまのちか／＼とほどりにより、耳
を聳て、聞居たる、抑も此蛇皮線と云へるは、元是蟹の堅器にて、總ての丈三
尺に、天地神の三体を表し、棹の長さ、を陰陽の二氣に象り、海老尾の五寸ハ
天の五星に準じ、胴の廻り六寸四分に造るは、地の六合を表し、厚さ三寸と
したるは、高下平の三形たり、天柱は天の半月の形を摸し、三つの糸巻は、虚
精、陸、順、曲、順の配し、即ち一の糸を、虚精と云ひ、二の糸を、陸、順と号し、三の糸

海潮瑠璃秘傳

海 潮 瑠 璃 秘 傳

を曲順と呼ぶ。左らば三筋の糸に森羅萬象を顯し宇宙の物一トつとして茲に佛を移さずと云ふ事なく、一の糸に一越斷金平調勝絶の四つを兼、二の糸に下無双調覺鐘苗鐘の四を籠め、三の糸に鸞鏡盤涉神仙上無の四を備へ、十二の呂律に壹年を表し、彼の風雅やかなる女と車を同うせしとき、顔薺の花の如しと謠ふは遣を蕩かす鄭衛の二風、國を損ふの淫聲の如しと雖も、尙能く讀み用ゆるは却つて國を治むるの誠なりと註せしか如く、治國の元たる禮樂の鄭々として聞ゆるは之れ有難き妙音なりイデヤ調べて見すべしと彈きあらしたる其音は颯々／＼として松風の清き流れに玉散水の岩に咽んで潺／＼と泡を飛ばそや木波ふ狙の腹を斷つ不思議の秘曲、琴々撥々面白や

「チャウリヤウ。フリヤウ。ソレヒヤヲニ。リヤ／＼。ニ。イヨアリ。ヤヨイ。フリ」

「ヨウソレリ。ヒヤウフリヤウ。」

「この人のうちにつばみてつゆまちようれしもさくのはなやゆる

海 潮 瑠 璃 秘 傳

海 潮 瑠 璃 秘 傳

「ときはなるまつのかわるもなきまいつもすこりはいるぞまさる

「うれしさよにはのたけのふし／＼にきみがよろづのよわいこめて

「むかしうらめたるんあかつきのとりん今としにならすしらなあなや

「つきやむらしつきやすかゝわてゆゝやひとこゝろ

「つきひかさなればとしやよくれどもしりなけるいろくたひのろらに

「たひやはまやとりくさまくらこゝろねてもわすられんろかおそは

とあるは彈きにける、抄校疊に頭を附け、是は／＼有難き御指南一々覺へ申したり、年月願ふ念願の届きて此上の喜び候はず、異國の者ども願ひなく、早速に教へ給わるうれしさよ、歸國の上は神と拜め朝夕禮拜なし奉らん辱しと喜ぶ中に平兵衛は一間を出で、勇みをなし、いかに兄上此く残りなく授かる上は我日の本の言辭に通し、糸に合せて調べ見られよ、いかよもろれ／＼此秋香も鴻基殿紹達殿も日本に長く居たれば言葉の程は合點せり、殊更御身は名人なり、品こそ變れ音は變らヒイザ／＼／＼

海 潮 瑠 璃 秘 傳

一曲ど、皆が勤めに檢校は暫し小首を傾けしが丁ど膝打ち、チ、夫れく覺へし事をためし見るは是に如く事あらざるべしイデア一曲ど、蛇皮線を手に取り上げて唄る出す
ちよの始めのてんにてゐる月。八十五夜が盛よのあの君さまはいつも盛
りよな
師も優しき竹の色への千とせのろの松が枝に栖くむ鶴の千萬代に譽
を傳ふ功績は實に石村が金鐵の心の巖片糸の糾りに糾られて續みおこ
たらぬ願の糸の糸長旅を重ねて月日を重ねね古郷へイザヤ歸らんと平兵
衛檢校両手を附き段々との御教示來るが否御指南に預り悉く秘曲の御
許御禮言葉に尽難し今暫くは御傍にあつて御恩の萬一を酬ひ奉りたく
候へ共、都の方も心に係り候へば早出立度候と述ぶれば鶴臺も打うなづ
き、そは御邊等の心任せ我も此後日の本に遊ぶ事のあるならば必ず供に
首づれ申さん殊に旅路も長ければ心を附けて行かれよと残る方なき心

切の國は換われと換らぬ眞、イザおさらばと名く、に名残を告て立出る、
見渡す空は雲近かく、松の玉琴とうく浪の浦鼓うつやうつゝのうつつ
山夢を辿りてつく細杖に、葛の細道石村兄弟、秋香共に三人が浦邊をさし
て急ぎ行

附言

琉球踊等腹稿今二段あれども徒らゝ不文を
弄するの譏もあるべく殊に實際の一夜漬け
なれハ兎も角書々の如くよて筆を擱き申候

石村檢校 竹廼小田卷 終

大正十三年五月壹日第七版印刷
大正十三年五月五日第七版發行

淨瑠璃砂傳 附

定價金壹圓

著 作 者

山 田 鋤 月

大阪市南區西町通四丁目三十一番地

發 行 兼
刷 行 者

千 葉 德 松

大阪市南區安堂寺橋通二丁目二十六番地

印 刷 所

山 田 元 吉

不 許
摸 寫
複 製

發 行 所

大阪南區鹽町通
四丁目三七番地

舊曆日座内版
二六三八四番

千 葉 久 榮 堂

賣 捌 所 全國至る所有名なる書店樂器店にあり